第三節　上水道の近代化と道路の整備

上水道の整備拡張

昭和九年四月一日、日高町は大正十三年に誕生した日高上水道株式会社のすべての財産を一二万円で買収し町営水道とした。取得財源は四万四四〇〇円を大蔵省より借入れ、残額七万五六〇〇円は日高町水道公債を発行して調達した。この時の概況は水道特別会計予算九八三九円、水道使用料九三〇〇円、給水区域一〇部落、給水戸数六六〇戸、人口四二四五人、給水区域内未給水戸数四一三戸、人口二四六〇人であった。

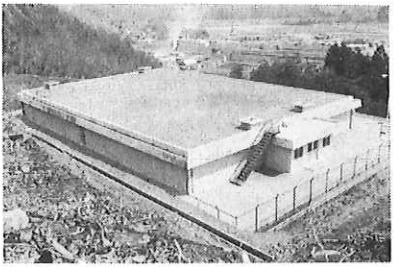


写真270　岩中配水池

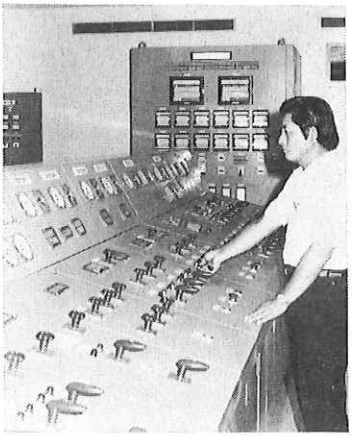


写真271　水道事業所機械室（岩中）

昭和七年に十戸湧水を取水し給水区域を増加する第一次拡張事業が実施されたが、その後使用水量の著しい増加によって、年中制限給水と同様の状況を来たし、さらに配水管が老朽化したため、昭和二十五年から昭和二十八年へかけて第二次拡張事業が実施された。水源補強のた

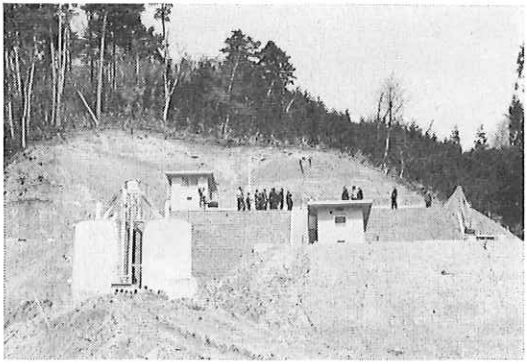


写真272　神鍋地区広域簡易水道配水池全景（稲葉）

め江原字立安田地先円山川左岸に集水井二基を設けて伏流水を揚水し、ポンプ場で滅菌処理の上、既設管に接続し通水した。この結果計画給水人口を一万人とし、一般給水一日平均一二五〇立方メートル、工業用水一日平均七五〇立方メートルが可能となった。

その後、第二次拡張事業により設置した江原河原の取水井が、円山川改修によって撤去移転しなければならない事態が生じた。さらに町村合併の条件により、国府地区へ上水道を拡張することもあって、第三次拡張事業が昭和三十三年から三十四年へかけて実施された。水源は岩中字荒堀地内国道沿いに取水井を築造した。この結果計画給水人口一万三〇〇〇人、一日平均一九五〇立方メートルの給水が可能となり、国府地区が給水区域に編入された。

さらに、日本経済の急成長に伴い、生活様式の変革、環境衛生思想の普及によって水の消費量が激増し、工業用水量の増加もあり、また統合中学校の建設、三方地区の一部（伊府・猪子垣・芝・野・庄境）、八代地区の一部（奈佐路・藤井・谷・中）、日高・国府地区の未給水区（祢布・水上・山本・竹貫）の簡易水道を統合して、上水道給水区域に編入するため、昭和四十一年から同四十四年へかけて第四次拡張事業が実施された。この結果、計画給水人口一万四〇〇〇人、一日平均四九〇〇立方メートルの上水道に拡張整備された。

表123　簡易水道施設表（昭和43年現在調べ）

No.	施設名称	建設年月日	No.	施設名称	建設年月日
1	八代水道組合	昭和 6. 5.31	17	栃本水道組合	大正12.12.31
2	猪爪簡易水道	昭和27. 5.30	18	山田簡易水道	昭和34.11. 1
3	赤崎水道組合	昭和10. 5.20	19	竹貫　〃	昭和 5. 2.28
4	篠垣　〃	昭和26.11.30	20	藤井　〃	昭和32. 3. 6
5	佐田　〃	昭和 4. 4. 1	21	谷　〃	昭和10
6	観音寺簡易水道	昭和32.12.10	22	中　〃	昭和 8. 4
7	栗山水道組合	昭和31. 5. 1	23	浅倉　〃	昭和32. 3
8	羽尻　〃	昭和29	24	久斗　〃	昭和 5
9	河畑　〃	昭和31. 3.31	25	夏栗　〃	昭和 2
10	金谷　〃	昭和30. 7	26	多田谷　〃	大正15
11	田ノ口特設水道	昭和43. 8.30	27	神鍋　〃	大正15
12	荒川水道組合	昭和31. 5. 1	28	名色　〃	大正13
13	十戸簡易水道	昭和32. 2. 8	29	稲葉　〃	昭和 3. 9.20
14	頃垣水道組合	昭和12. 8.31	30	水口　〃	昭和 3. 9. 2
15	石井　〃	昭和 6.10. 1	31	東河内　〃	昭和 3. 9. 2
16	山宮　〃	大正15. 6.30			

上水道の近代化と簡易水道

昭和四十年代の急速な経済成長につれて、工業用水並びに一般家庭用水の需要が急増し、夏季における局部的断水が出はじめたため、水源・配水池等の増強が必要となり、昭和四十八年から同五十二年へかけて第五次拡張事業として岩中浄水場（浄水池・管理棟）が新設された。浄水池は水源からくみ上げた地下水を沈澱・ろか・滅菌する。管理棟はポンプ室・電気室・管理室・水質検査室・研修室・宿直室等からなり、送水用ポンプにより国分寺配水池・岩中配水池に送水する。電気室では取水・送水・配水などを自動調整で集中管理し、計量記録する。管理室は水道事業所職員の執務室となっている。

なお、昭和五十一年二月一日、浅倉・日置及び鶴岡の一部・栗山・広井・田ノ口の一部・十戸を給水区域に編入した。この結果、昭和五十七年度

の給水人口一万六〇〇〇人、一人日平均七〇〇リットル給水が予定されている。

神鍋地区各部落には簡易水道があったが、施設は老朽化し、水源不足、水質悪化もあり、また四季観光開発により観光客も増加したため、町及び地元でこの対策が検討された結果、従来の簡易水道を統合し、新水源による神鍋地区広域簡易水道を建設することになり、昭和四十五年十月に着工し、昭和四十七年三月完成をみた。水源は稲葉川の最上支流の小城川砂防堰堤より取水し送水する。給水区域は神鍋（太田）、名色及び西気地区（山田を除く）全域である。

そのほかに小規模簡易水道は表123の通り多くの施設があるが、町上水道及び神鍋地区上水道施設の中に吸収されてゆきつつある。

県道姫豊線の国道三一二号線昇格

県道姫豊線（姫路―豊岡）は県の南北を結ぶ重要路線である。昭和九年、浅倉・岩中間の県道を改修し、尾川橋を架橋したが、道路の両側には実に美事な桜並木が続いていた。（写真273）

昭和二十七年から岩中・宵田・江原と漸次拡幅工事を実施し、昭和三十二年に江原・鶴岡間一二六〇メートルを拡幅、完全舗装を完了し、順次工事を広げて、昭和四十年全線の舗装を完了した。昭和四十五年四月一日から国道に昇格して、国道三一二号線となった。これまで姫豊線の国道昇格を熱望した二市一一町で結成された期成同盟会の陳情が奏功したものである。昭和四十七年から三カ年をかけて岩中―鶴岡間の消雪装置が初めて完成した。しかし、最近の自動車交通量の増加は、国道の狭隘のため交通渋滞を来たし交通困難

の状態となったので、国道三一二号線バイパスが計画されている。その予定ルートは次頁図14のとおりである。

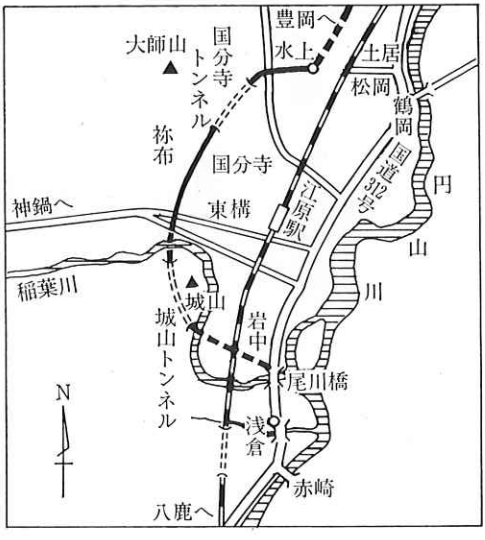
県道出石・村岡線ほかの整備

県道主要地方道である出石・村岡線二五は出石町鳥居橋から鶴岡に達し、国道三一二号線を重用し、江原郵便局前から分れて久斗、山田を経て村岡に至る重要道路である。

この道路は、明治十三年頃と明治三十三年頃に大修繕工事が実施されたが、各村費負担が過重で苦労したため、県道編入運動を行い、明治四十一年にそれが奏功し、直ちに県直営で改修施工され、明治四十四年に今の道筋を建設した。大正時代になると、ろう石の採掘運搬の激増により道路の破損が甚だしくなり、県道修繕が行われた。その後、拡幅工事も行われ、終戦後、スキーが隆盛となるに従い入山者が増加し、バス・自家用車の通行も激増したため、昭和二十八年から拡幅工事、完全舗装に着手し、約二〇年の歳月と莫大な経費を費して、昭和四十七年全線の道路整備が完成した。しかし山田から村岡へ通ずる山道の整備は未完成である。

写真273　県道姫豊線の桜並木（昭和30年頃）

図14　国道312号線日高バイパスルート
（実線は決定ルート、点線は調査ルート）



県道山田・日高線二五八は、西気小学校から水口・稲葉を通って村岡町山田に通ずる県道で、稲葉までは幅員六・五メートルの完全舗装道である。稲葉から村岡間一一キロメートルの改良工事の起工式は、昭和五十年五月村岡町で行われた。幅員七メートルの完全舗装道で総工費五十数億円、工事完成まで数カ年の予定である。

県道河内・美方線一三五は、栗栖野から東河内・大机山・水山峠・三原・大森を経て竹野町河内に達するもので、栗栖野から東河内までは、幅六・五メートルの完全舗装道であるが、これより先は山道で車は通行不可能である。

県道耀山・日高線二五九は、久田谷から栗山・羽尻・金谷・金山峠を経て村岡町耀山に達するもので、久田谷から金谷の先まで舗装道である。

県道十戸・八鹿線二六八は、十戸から荒川・知見を経て八鹿町馬瀬に通ずるもので、昭和四十九年には知見まで完全舗装された。

県道竹野・日高線一三四は、国道日吉から山本・藤井・八代・小河江・番屋峠・森本を経て竹野に通ずる

表124　等級別町道舗装状況（昭和57年３月）

	道路延長	内車輌通行可能延長	高級舗装		簡易舗装		防塵舗装		舗装率	未舗装	
			L	A	L	A	L	A		L	A
1級	m 33,550.5	m 32,960.5	m 13,616.3	m² 84,041.0	m 15,827.7	m² 69,528.4	m 1,377.0	m² 8,317.0		m 2,139.5	m² 11,201.0
			% 41.3		% 48.0		% 4.2		% 93.5	% 6.5	
2級	m 47,088.7	m 43,120.7	m 10,326.0	m² 70,409.0	m 23,184.7	m² 87,588.2	m 1,368.0	m² 6,020.0		m 8,242.0	m² 30,010.7
			% 23.9		% 53.8		% 3.2		% 80.9	% 19.1	
3級	m 60,164.0	m 47,699.0	m 4,607.0	m² 26,679.5	m 26,250.0	m² 81,036.4	m 2,357.0	m² 8,265.7		m 14,485.0	m² 46,075.6
			% 9.7		% 55.0		% 4.9		% 69.6	% 30.4	
4級	m 124,759.8	m 45,786.4	m 2,435.9	m² 11,003.4	m 16,187.3	m² 46,841.6	m 150.0	m² 400.0		m 27,013.2	m² 71,162.1
			% 5.3		% 35.4		% 0.3		% 41.0	% 58.9	
計	m 265,563.0	m 169,566.6	m 30,985.2	m² 192,132.9	m 81,449.7	m² 284,994.6	m 5,252.0	m² 23,002.7		m 51,879.7	m² 158,449.4
			% 18.3		% 48.0		% 3.1		% 69.4	% 30.6	

舗装率％＝内車輌通行可能延長に対する比

もので、町内分は舗装道である。目坂・床瀬間は、昭和四十四年自衛隊により改修工事が行われた。

県道八代・石井線五二九（八代―石井）は、昭和四十八年六月県道に昇格したが、幅員二・五メートル～四メートルで、まだ改良整備されていない。

県道藤井・上石線二五〇（藤井―上石国道）は、幅員四～六メートルで完全舗装である。

県道府市場・伏線二四九（府市場―上郷国道―伏）は完全舗装されている。

県道江原停車場線一六二（江原駅―国道）は、幅員五・五メートルで完全舗装されている。

町道の舗装化

日高町内の重要道路には、国道・県道があるが、この

負担区分一覧表

五反未満戸数	五反以上戸数	一町以上戸数	歩合総積戸数	負担金額	負担金額合計	一戸当り負担金額
12	17	2	91.5	15,280円	20,692円	504円
14	33	9	181.0	30,227	58,881	920
36	45	21	318.5	53,189	110,045	866
18	21	17	196.5	32,815	141,239	1,476
15	18	7	125.5	20,958	106,679	1,871
7	13	13	120.0	20,040	95,808	2,177
8	14	13	124.5	20,791	120,236	2,671
10	14	3	79.5	13,276	119,150	3,843
8	17	22	176.0	29,392	240,796	4,151
4	7	15	103.5	17,284	224,354	6,063
2	9	22	134.0	22,378	147,865	4,349
9	4	3	46.0	7,682	43,499	1,673
22	15	3	103.0	17,201	73,153	1,524
165	227	150	1,799.5	300,513円	1,501,401円	

純消費者	五反未満	五反以上	一町以上
0.5	1.5	3.5	4.5

ほか現在認定されている町道は約三八〇路線があり、その延長は二六万五五六三メートルに及んでいる。これら町道の舗装状況は六九・四％実施され、簡易舗装が四八％を占めている。これらの町道は網の目のように広がり、町の動脈として、重要な役割を果している。等級別町道舗装状況は前頁の表124のとおりである。

なお、町道神鍋床瀬線は、昭和四十七年自衛隊により頂上部を拡幅し、その後改良工事をすすめ、昭和五十六年より舗装にとりかかっている。

山陰線国府駅開設　昭和二十三年十月十三日、山陰線国府駅の開通式が盛大に行われた。

表125　国府停車場設置費各部落

部落名	新駅への距離(丁)	江原豊岡駅への距離	距離による負担率	各部落歩合計	負担金額	消費純戸数
松岡	21	江原へ 19丁	0.23	9.23	5,412円	10
土居	19	21	0.78	49.92	28,654	8
上郷	19	21	0.78	99.06	56,860	25
府市場	15	25	1.97	187.15	107,424	39
府中新	13	27	2.62	149.34	85,721	17
堀	13	30	3.00	132.00	75,768	11
野々庄	11	33	3.85	173.25	99,445	10
池上	5	35	5.95	184.45	106,874	4
芝	5	38	6.35	368.30	211,404	11
上石	2	38	9.75	360.75	207,070	11
竹貫	7	45	6.43	218.62	125,487	1
納屋	12	豊岡へ 42	2.40	62.40	35,817	10
上佐野	16	42	2.01	96.48	55,952	8
計			46.12	2,091.15	1,200,888円	165
備考	駅間距離利用価値に八割（120万円） 経済力に　二割（30万円）					

国府駅実現までには、第一回請願から実に四〇年の歳月を要している。

明治四十一年、山陰線には、江原駅、豊岡駅が予定されたが、かつての但馬の中心地である国府村の地が駅予定から除外されたことは、国府を中心として地理的に関連深い地域の人達に不満を残していた。

そこで、明治四十一年八月、二回にわたって国府村・八代村・中筋村・八条村・新田村・神美村・小坂村の七カ村は、連署をもって、逓信大臣（男爵後藤新平）に対し「停車場予定請願書」を提出した。

第三回目の請願は、大正五年四月に行われたが、この時には、前記七カ村に室埴村・奈佐村・合橋村・高橋村・

写真274　国鉄山陰線国府駅

清滝村・西気村の六カ村を加え、合計十三カ村の連署となり、この請願には、十三カ村の物産統計（米・大豆・麦・桑葉・繭・生糸・杞柳・杞柳製品・瓦・竹材・薪・木炭）を附している。

第四回の請願は、大正十一年七月に行われ、翌十二年からは鉄道大臣・次官・局長・課長・代議士等に対し精力的に運動が進められ、国会へは、斉藤隆夫代議士を通じて陳情・請願を行った。

この結果、大正十二年四月、ようやく神戸鉄道局の詳細な実地調査が行われた。

関係町村は、大正十五年、決意も新たに第五回目の請願を鉄道大臣（子爵井上匡四郎）に対して行った。この時の請願は、国府村・出石町・室埴村・小坂村・神美村・中筋村・奈佐村・八条村・八代村の九カ村となっている。国会への請願は、この時も斉藤隆夫代議士を通じてなされたが、昭和二年一月下旬、いよいよ請願が採択され、停車場設置は曙光を見ることになった。

昭和四年七月、江原豊岡間に信号所の設置が決定、同年八月、停車場設置が協議に上ったが、実現の運びに至らず、遂に戦争へ突入してしまった。

戦後になって、昭和二十二年、停車場期成同盟会が結成され、最後の請願を二月に行い四月十六日、大阪

鉄道局管理部長他五名の現場視察をうけて工事着工の運びとなり、総工費二六二万一六三一円、地元負担一五〇万一四〇一円をもって翌年工事は完成した。（表125）

第四節　学校教育の整備充実

学校施設の整備・充実

戦後の教育は、国家主義の打破から始まったが、六三三四制を決めた学校教育法の施行によって、新制中学が誕生した。また教育委員会制度も確立され、ようやく、敗戦の打撃から立上ったが、教育の新制度の実施については、何よりも先ず、新制中学校の建築が先決問題であった。

昭和二十二年四月一日、制度的には新制中学は発足したものの、町内総ての新制中学校は小学校の間借りでしのぐありさまで、住民の強い要望に従って、各町村はそれぞれの財政規模に応じ、国庫補助を頼りに年を追って建築整備を行ったが、この中学校の建築の各町村の財政に及ぼす影響は極めて大きかった。昭和三十年三月には町村合併が行われ、六ヵ町村の小・中学校は、一斉に新日高町立と変って再出発を行ったが、新制中学校の関係建築が完了するのは、昭和三十七年である。昭和四十二年から四十三年にかけては、東西統合中学校の新築が完成し、その後は、老朽化した各小学校の新築、改築、増築があいついで進められた。町民待望の学校プールも、昭和五十二年度をもって、小・中学校全部に設置された。次に各小学校・中学校・幼稚園の整備充実状況並各学校の設置状況を一覧表にして掲げおく。（表126、127、128）

表126　学校等整備事業実施一覧表

年度	校舎建設工事		校舎改装工事	附属建物工事	プール建設工事	園舎建設外
三〇	府中中学校(体)			静修小学校		
三三		三方中学校(給)				
三四	日高中学校(給)	三方中学校(技術)		八代中学校		
三六	府中中学校(給)	(自転車)		日高中学校		
三七		三方中学校(理)		府中中学校		
三八						八代、大岡、三方
三九	西気小学校(給)					金山各分校閉校
四一	日高東中学校(完成43)	日高西中学校(完成42)			静修小学校	
四二	三方小学校移転				日高小学校	
四三	日高西中学校(体)	実質統合(西中)		日高東中学校		(学校給食センター、給食開始)
四四	三方小学校	実質統合(東中)		日高西中学校	日高東中学校	
四五	西気小学校	日高小学校		日高小学校	日高西中学校	日高幼稚園
四六					府中小学校	西気へき地保育所開設
四七	八代小学校				西気小学校	
四八	清滝小学校移転、増築		八代小学校		三方小学校	
四九	府中小学校		清滝小学校			府中幼稚園
五〇	日高小学校		日高小学校	三方小学校	清滝小学校	清滝保育所開設
五一			静修小学校	日高小学校		
五二	静修小学校	府中小学校	日高東中学校	三方小学校	八代小学校	
五三			日高西中学校	西気小学校		
五四			日高小学校			
五五						

表127　小学校、中学校の設置状況（昭和五十七年度）

学校名	職員数	学級数	児童数 男	児童数 女	児童数 計	学区域（○印所在地）
府中小学校	二二	一二	一八四	一六三	三四七	松岡、土居、上ノ郷、府市場、府中新、堀、○野々庄、池上、西芝、上石、国府テラス、竹貫
八代小学校	一一	六	四六	三四	八〇	藤井、奈佐路、谷、○中、猪爪、八代、河江、小河江、大岡
日高小学校	三三	二〇	三七一	三一五	六八六	江原、宵田、○岩中、浅倉、赤崎、東構、久斗、祢布、国分寺、水上、山本、鶴岡、日高、日置、日吉
静修小学校	一〇	六	四三	四四	八七	○道場、久田谷、夏栗
三方小学校	一六	一〇	一四八	一四八	二九六	篠垣、伊府、佐田、知見、森山、観音寺、○栗山、殿、羽尻、田ノ口、広井、猪子垣、荒川、芝、野、庄境
清滝小学校	一二	六	八七	六六	一五三	名色、神鍋、栃本、○山宮、石井、頃垣、十戸
西気小学校	一四	七	三四	五二	八六	万場、神鍋、山田、万劫、稲葉、水口、○東河内
日高東中学校	三二	一六	三〇八	二八五	五九三	府中、八代、日高、静修各小学校々区域、○水上
日高西中学校	二〇	九	一三五	一三〇	二六五	三方、清滝、西気各小学校々区域、○庄境

表128　幼稚園の設置状況（昭和五十七年度）

園名	職員数	学級数	園児数	備考
府中幼稚園	二	二	六二	府中小学校併設（園長兼務）
日高幼稚園	四	四	一一二	日高小学校併設（〃）
三方幼稚園	二	二	六〇	三方小学校併設（〃）
清滝幼稚園	一	一	三四	清滝小学校併設（〃）

八代、静修、西気小学校区はその地区の保育所に委託している。

学校教育の現況

戦後四回目の改訂が行われた学習指導要領は、①人間性豊かな児童生徒の育成、②ゆとりと充実の学校生活、③基礎基本を押えた教育内容の三本の柱を課題として、小学校は昭和五十五年度、中学校は昭和五十六年度から実施された。日高町もこの趣旨に則り、各校夫々に創意工夫を加えて教育実践を進めている。

(1)教科学習指導　学習指導の方法として、普通学級では、一斉・グループ・個別指導を組み合わせて進めているが、心身障害児学級は、小学校四校（五学級）中学校二校（二学級）を開設し、児童生徒の学習権の保障に努めている。授業時間は小四五分、中五〇分の単位時間を確保し、基礎基本の徹底を重視するとともに、授業時数の削減による余り時間は、学校裁量によって人間教育の場として工夫実践している。

(2)教科外の学習指導　道徳教育では、児童生徒の道徳的判断力・心情・態度と実践力の育成に努めているが今後一層努力の要がある。特別活動では、中学校の生徒会活動・クラブ活動の外、放課後の部活動が盛に行われ、対外試合も優秀な成果をあげている。小学校でも児童会活動・クラブ活動の外、ソフトボール・バレーボール等の部活動を行っている学校もあり、非公認ながら但馬大会での優勝、県大会参加等の成果もおさめている。生活指導では、近年全国的に児童生徒の非行年令が低下の傾向にあり、各校とも生活指導の強化を図るとともに行政・学校・家庭・地域の一体的指導協力体制の強化につとめている。

進路指導・健康教育・人権教育・給食教育・社会教育との連携等についても各校とも力を注いでいるが、省略する。次に本町教育の現況を紙面の許す範囲で記録しておく。

地域に根ざす教育　新しい教育は各校の主体性と創意工夫に期待するところが大きい。新しく生まれた学校裁量の時間を中心に、地域の人々から学ぶと共に地域連帯を進める教育が深められつつあり、「祖父母の歴史に学ぶ会」（府中小）、三世代の交流を図る「ミニミニ児童館」（八代小）、地域の文化を学校に採り入れる「清滝まつり」（清滝小）、老人と児童の交流を図る「おとしより学級」（三方小）、母親の文化的向上を目ざす「母の会」（東中）、等で成果があげられている。

指定研究の発表　国・県・但馬・町各段階の教育研究指定が行われ、各校は研究発表会を持ってその成果を発表してきている。県段階以上の指定研究・発表を挙げてみると次の通りである。産業教育（文部省昭33東中）、家庭科（県昭44日高小）、図工科（文部省昭44・45日高小）、学校給食（県昭41府中小）、体育科（県昭43三方小）、同和教育（県昭44・45東中）、生徒指導（文部省昭48・49東中）、観察指導（県昭48・49東中）、放送教育（ＮＨＫ昭49西中）、体力づくり（文部省昭55～58府中小）、基礎学力指定校（県54・55日高小、昭56・57日高東中）、地域改善教育（文部省昭57・58日高小）、町の段階では五十年代から基礎学力の指定・社会教育諸学級の主催や指定を行って、学校・社会両教育の振興を図っている。昭和五十五年度から開始された町内小中学校経営研究会は県下でもユニークな存在となっている。

部活動各種表彰　中学校の部活動や小中の各種活動も華々しい成果をあげている。昭和三十年代四十年代を通じて、西中のスキーの活躍が目ざましい（昭30・31・33・36～39 41～45県優勝）。

東中は卓球（昭42・44県優勝・昭46近畿3位）、剣道（昭48県優勝）で活躍している。小学校では社会教育の分野になるが、少女バレーで日高小・三方小が県大会へ出場した（昭56）。他の活動では表彰として、交通安全（県昭44府中小・49・56八代小・51三方小）、子ども銀行（大蔵省昭43府中小）、学校安全（文部大臣昭49府中小・県昭52西中）、書道コンクール（県昭52・56西中）、ＮＨＫ合唱コンクール（県出場昭31・32日高小）、県音楽連盟音楽コンクール（優秀賞昭49日高小）、ＭＢＳ音楽コンクール（西日本出場昭45～54日高東中）、給食（県昭51三方小）等がある。

校訓　新指導要領に基づき各校はそれぞれ地域の特質を生かした教育の指標を校訓として掲げて指導にあたっているが各学校の校訓はつぎの通りである。

府中小学校〈自主、敬愛、協同〉八代小学校〈強く、正しく、美しく〉日高小学校〈自主、調和、創造〉静修小学校〈自律、創造、健康、敬愛、協同〉三方小学校〈考える子、優しい子、鍛える子〉清滝小学校〈進んでつくる丈夫な体、力を合せて楽しいくらし、確かな知識と豊かな心〉西気小学校〈たくましく、清らかに、ともに高くはばたけ西気っ子〉日高東中学校〈自ら学び励む生徒（知性）たくましい体と心を身につけた生徒（健康）創造する喜び、美に感動する心を持った生徒（情操）〉西中学校〈剛健・創造・敬愛〉。

学校給食制度の普及　町内における学校給食のはしりは、戦時中昭和十四年の府中小学校の味噌汁給食であるが、戦後昭和三十四年日高小学校に日高小中学校合同の給食調理室が新設さ

れ、自校方式の給食が開始された。以後、各小学校で行われた。

昭和四十三年、センター方式の学校給食を行うこととなり、日高町岩中の日高小学校裏に学校給食センターを新設した。

年間給食日数は、各年度とも、小学校一八〇日、中学校一七〇日、一食当り単価は、昭和四十五年小学校五〇円、中学校六〇円、昭和五十六年は小学校一七〇円、中学校一八〇円となっている。

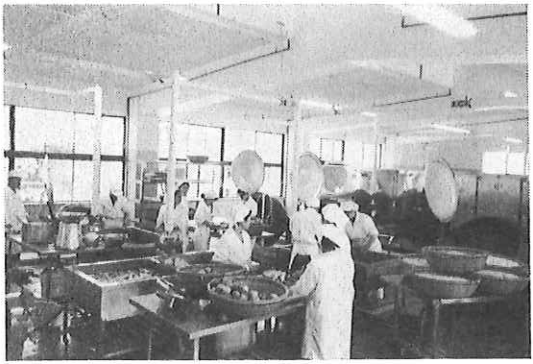


写真275　学校給食センター作業風景

第五節　社会教育の充実発展

生涯教育の実施　科学技術の進歩や経済の発展の中で、社会変化が急激に進みつつある。幼児より老人まで常に学習が求められるようになったが、社会教育でも子育てから、老人の生きがい作りまで取組まれるようになった。

乳幼児教育としては、乳幼児学級「明日の親のための学級」（国庫）・「赤いほっぺ視聴グループ」・「幼児教育体験教室」・講演会等を開催した。

婦人対象としては、婦人学級や高齢者婦人生きがい創造学級をはじめ生活課題をテーマとした学習が婦人会とともに進められている。

成人対象としては、しつけ学級や家庭教育学級、人権尊重の学習会を開催している。高齢者社会に対応するため高齢者教室を各地区毎に設置し趣味、盆栽、手芸などの教室を、老人クラブ連合会とともに実践しつつある。

公民館の活動　日高町公民館は、社会教育の綜合的実施機関として、町村合併後間もない、昭和三十年七月十五日他町村に先がけて設立された。中央に中央公民館を置き、旧町村毎に地区公民館を設置した。当時専用の施設はなく、中央公民館は旧自治体警察の庁舎を改造し館長（初代館長友田栄一）外兼任主事、書記各一名を配し、綜合計画、連絡調整にあたり、全町的な事業の遂行をなし、地区公民館は学校施設の開放により、地区館長、主事をおき、住民のニードを受取め、地域の特色を発揮する事業の推進につとめていたが昭和五十年代にはいって、農業構造改善事業等の導入によるコミュニティ施設として特色ある整備が進められ、漸く本来の公民館活動の本格的な活動が期待されるようになった。

ここに発足以後の主な活動とその施設について記録しておく。

①　町広報、公民館だよりの発行

「町公報」は、昭和三十年七月に第一号を発行し七二号まで担当、その後総務課が担当している。公民館報は昭和四十七年五月より「公民館だより」を発行して公民館活動の充実に努めている。

②　美術展

絵画、写真、書道の三部門を一般より公募、さらに児童生徒の作品を展示し昭和五十六年度で二四回を迎

えている。

③　町民野球大会

毎年八月に、町長杯争奪による大会を開催、昭和二十五年を第一回として合併後も引続いて開催し、昭和五十六年度で三一回となった。

④　町民ハイキング

写真276　日高町美術展風景（日高小学校体育館）

健康づくり事業として毎年実施、昭和三十三年（蘇武岳コース）をスタートとし、昭和五十六年度で三九回となった。

⑤　成人式

昭和三十三年一月十五日、第一回を挙行して以来、昭和三十五年から公民館事業とし、昭和四十年から十一月三日に実施することになり、昭和五十六年度で二四回となった。

⑥　町民体育祭

競技本位でなく、レクレーションをとり入れ、地区毎に毎年開催して盛況である。

⑦　図書館

中央公民館附属図書館として、利用率は相当高い。昭和五十六年度末で蔵書数は一万三四〇七冊となっている。各区への図書貸出

写真277　八代生活改善センター

写真279　三方地区基幹集落センター

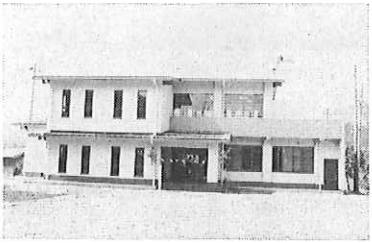


写真278　西気地区コミュニティセンター

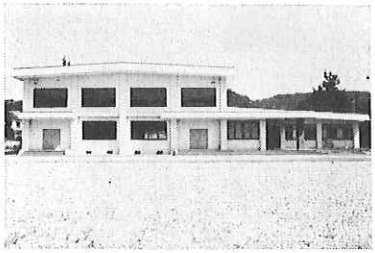


写真280　清滝会館

し、巡回文庫による利用も年々高まっている。その他、子ども会活動、野外活動を初め諸講座講演会など積極的な取組みを行っている。

公民館の施設は、一時、小学校校舎の有効利用等により補って来たが、昭和五十年代にはいって、農業構造改善事業等の導入によるコミュニティ施設として、特色ある整備が進められている。

① 日高町中央公民館（日高地区公民館）

日高町農村環境改善センター内を、昭和五十三年九月より、日高町中央公民館・日高地区公民館とともに活動の舞台としている。同センターの施設内容は第二十

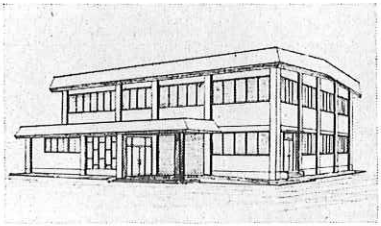


写真281　国府地区公民館完成予想図

三章第四節のとおりである。

②　国府地区公民館

昭和五十八年二月の完成を目途に、建築が進められている。鉄筋二階建、延面積四八四平方メートル、一階には多目的ホール、会議室二、二階には会議室一の四室となっている。

③　八代地区公民館

八代地区生活改善センターを活動の舞台としている。昭和四十七年三月完成。木造平屋建、延二四〇平方米、日本間二室、洋間、調理実習室、談話室となっている。

④　三方地区公民館

昭和五十六年九月に完成した三方地区基幹集落センターを活動の舞台としている。鉄筋コンクリート造二階建、延面積四九八平方メートル、一階は和室、洋室の会議室、調理実習室、多目的ホール、二階は研修室の一室となっている。

⑤　清滝地区公民館

昭和五十七年一月に完成した多目的集会センター清滝会館を活動の舞台としている。鉄筋平屋建、延面積四二〇・五平方メートル、多目的集会室、和室、調理実習室、洋室となっている。

⑥　西気地区公民館

昭和五十六年三月完成した西気地区コミュニティセンターを活動の舞台としている。鉄筋コンクリート造

二階建、延面積三八二平方メートル、一階は和室、調理実習室、会議室、二階は集会室となっている。

文化財保護の進展　日高町には多くの県指定及び町指定の文化財があり、町としてその保護に力を入れている。特に、埋蔵文化財については、神鍋遺跡や但馬国分寺など数多くの遺跡が存在している。これらの遺跡の内容については、発掘調査の実施により除々に解明されつつある。（表129）。また、発掘調査等に伴って出土した多量の石器や土器・瓦類は、日高町立埋蔵文化財収蔵庫（昭和五十二年度建設）に、柱や井戸枠などの木製品は木製出土品保存用水槽（昭和五十六年度建設）に保管し、随時、展示会等を開催している。町内に所在する指定文化財は表130、131にかかげておく。

青少年教育　昭和五十六年度には、町中央公民館主催による第九回年少リーダー養成研修会、第三回少年少女ソフトボール大会および第二回少年少女卓球大会が実施された。子ども会開係では、各区子ども会育成会長研修、母親リーダー研修会、モデル子ども会指定、共済事業助成等が行われた。

子ども会育成協議会は、国府地区で昭和二十年、いち早く結成されたが、子ども会活動としては宵田の明星子ども会（昭和二十八年結成）が先進的活動を展開し、昭和三十一年には文部大臣賞を受賞した。

日高町文化協会　昭和五十六年度現在で日高町文化協会に所属する文化団体は、表132の通り二五団体となっているが、文化協会では、昭和五十六年度に第三回目の文化祭を開催した。

表129　日高町埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査年月	遺跡名	所在地	調査内容	調査報告書その他
1	昭和27・7	祢布ケ森遺跡	祢布	一部発掘調査	『城崎郡日高町祢布ケ森遺跡発掘概要』 『史想』8号　1958 『祢布ケ森遺跡発掘概要』1952
2	27・8	馬場ケ先古墳	鶴岡	発掘調査	
3	30・10	宮ノ谷窯跡	中	須恵器窯跡発掘調査	
4	41・7	水上遺跡	水上	日高東中学校敷地造成となるため試掘調査	『水上遺跡と但馬国分尼寺』1967
5	42・8	羽根山古墳	水上	日高東中学校敷地造成中発見され発掘調査	
6	44・10	神鍋遺跡	神鍋	発掘調査	『神鍋遺跡』1970 『神鍋遺跡』1969
7	44・11	山宮遺跡	山宮	大岡山ゴルフ場道路敷地となるための試掘調査	『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集　1974
8	48・6	祢布ケ森東遺跡	国分寺 祢布	町民センター敷地となるため試掘調査	
9	48・8	祢布ケ森西遺跡	祢布	国道312号バイパス敷地となるため発掘調査	『但馬祢布ケ森西遺跡調査報告書』1976
10	48・8～52・8	但馬国分寺跡	国分寺	発掘調査	『但馬国分寺跡Ⅰ』昭和48年度調査概報1975 「但馬国分寺」『仏教芸術』103号　1975 『但馬国国分寺の礎石の調査考証』1962
11	49・4	森山遺跡	森山	ほ場整備事業中に発見され試掘調査	
12	49・8	楯縫古墳	鶴岡	測量調査	『楯縫古墳・岩倉古墳群調査報告書』1976
13	49・8	岩倉古墳群	神鍋	測量調査	同上
14	50・4	広井条理制遺構	広井	試掘調査、県営ほ場整備事業事前調査	
15	50・4	フンヅ遺跡	殿	同上	
16	50・2	三女寺遺跡	土居	試掘調査	
17	51・10	西谷遺跡	谷	試掘調査、八代団体営ほ場整備事業事前調査	
18	51・11	伊府遺跡	伊府	試掘調査、県営ほ場整備事業事前調査	
19	52・6	但馬国分寺跡	国分寺	発掘調査	『但馬国分寺木簡』1981
20	54・5	かいだ古墳	石井	マルイト開発行為に伴う発掘調査	
21	52・10	久田谷遺跡	久田谷 夏栗	試掘調査、県営ほ場整備事業事前調査	『月刊文化財』11月号　1978
22	52・12	久斗遺跡	久斗	同上及び久斗バイパス予定地試掘調査	
23	53・8	姫谷遺跡ほか	野庄境 芝荒川	試掘調査、県営ほ場整備事業事前調査	
24	53・10	南八代田遺跡	野々庄	試掘調査、八代団体営ほ場整備事業事前調査	「日高町南八代田遺跡採集の弥生土器」『兵庫考古』第7号　1979

表130　日高町の指定文化財（昭和56年現在）

記号番号	種別	類別	指定年月日	名称	所在地	所有者
天1	天然記念物	地質鉱物	昭44. 3.15	神鍋山及び神鍋溶岩流	日高町東河内神鍋ほか10区	日高町東河内区神鍋区、同左及び兵庫県
史1	史跡		昭44. 3.15	神鍋遺跡及びミダレオ古墳群	日高町神鍋	神鍋区(太田)
工2	有形文化財	工芸	昭45. 4.17	長楽寺の茶湯釜	日高町上石661	長楽寺
絵1	有形文化財	絵画	昭45. 4.17	隆国寺の襖絵（孔雀の図）	日高町荒川22	隆国寺
天2	天然記念物	植物	昭48. 3.29	天神社のトチの木	日高町万場480	天神社
工3	有形文化財	彫刻	昭48. 3.29	木像四天王立像	日高町鶴岡	井田神社
天3	天然記念物	植物	昭48. 3.29	山神社社叢	日高町山宮	山神社
書古1	有形文化財	古文書	昭48. 3.29	大円寺開山悦叔禅師語録	日高町神鍋	大円寺
工4	有形文化財	工芸	昭51. 3.26	大円寺釣鐘（弘誓の鐘）	日高町神鍋573	大円寺
史3	史跡	史跡（古墳）	昭51. 3.26	岩倉古墳群	日高町神鍋字鍬ヶ野	神鍋区
天5	天然記念物	植物	昭51. 3.26	名色の大モミジ	日高町名色	飯田為之
工5	有形文化財	工芸	昭52. 3.29	気多神社の鰐口	日高町上郷	気多神社
建1	有形文化財	建造物	昭52. 5.29	長楽寺薬師堂	日高町上石	長楽寺
無1	民俗文化財	無形文化財	昭52. 3.29	そうだろ節とヤチャ踊		神鍋民謡保存会
絵2	有形文化財	絵画	昭53. 3.24	隆国寺の襖絵	日高町荒川	隆国寺
工6	有形文化財	工芸	昭53. 3.24	久斗文楽人形の頭	日高町久斗	久斗文楽座
考1	有形文化財	考古資料	昭55. 4.21	風鐸	日高町国分寺	日高町教育長
考2	有形文化財	考古資料	昭55. 4.21	木簡	日高町国分寺	日高町教育長
天6	天然記念物	地質植物	昭55. 4.21	奇勝知見のとんがり山と大桜	日高町知見	知見区
彫1	有形文化財	彫刻	昭55. 4.21	磨崖仏	日高町羽尻	羽尻区
考3	有形文化財	考古資料	昭55. 4.21	玦状耳飾	日高町国分寺	日高町教育長
名1	史跡・名勝天然記念物	名勝	昭55.12.18	隆国寺石垣	日高町荒川	隆国寺
書2	有形文化財	書跡	昭55.12.18	進美寺文書	日高町赤崎	進美寺
彫2	有形文化財	彫刻	昭55. 4.21	薬師如来像	日高町国分寺	国分寺
天7	天然記念物	植物	昭56. 4.26	伽羅木	日高町山宮	大田垣彦弥
建2	有形文化財	建物	昭56. 4.26	大円寺山門	日高町神鍋	大円寺
彫3	有形文化財	彫刻	昭56. 4.26	宝篋印塔	日高町神鍋	大円寺

表131　兵庫県指定文化財（日高町内所在分）

記号番号	種別	類別	指定年月日	名称	所在地	所有者
天27	天然記念物	地質鉱物	昭42. 3.31	栃本の溶岩瘤（こぶ）	日高町栃本字西畑	兵庫県
天30	天然記念物	植物	昭43. 3.29	栃ガ谷平アスロナ群生	日高町万劫	万劫区
建76	有形文化財	建造物	昭43. 3.29	観音寺仁王門	日高町観音寺	観音寺
名7	名勝		昭47. 3.24	旧大岡寺庭園	日高町大岡17	大岡寺
工26	有形文化財	工芸	昭48. 3. 9	進美寺鰐口	日高町赤崎1150	進美寺
史51	史跡名勝天然記念物	史跡	昭52. 3.29	楯縫古墳	日高町鶴岡字森垣67の3	谷本政春
天76	天然記念物	植物	昭53. 3.17	長楽寺の散り椿	日高町上石	長楽寺

表132　日高町文化協会加盟団体一覧表（昭和56年現在）

区分	団体名	会員数	区分	団体名	会員数
絵画	日高チャーチル会	17	生花	日高町華道協会	19
写真	日高フォトサロン	20	読書	日高町読書会	22
詩吟	関心流日高吟詩会	19	文化財	日高文化財を守る会	90
詩吟	摂南流豊岡吟詠会江原支部	25	俳句	日高俳苑	19
詩吟	関西吟詩文化協会日高支部	83	つまみ画	日高町つまみ画同好会	7
詩吟	吟詩と舞踊研究会	31	尺八	竹流会	18
天体	里の会	3	琴	双龍会	20
音楽	日高音楽協会	30	琴	三木会	10
合唱	日高女声合唱団	43	舞踊	霞寿喬美会	50
民謡	神鍋民謡保存会	200	舞踊	菊扇会	20
民謡	日高三味線民謡友の会	40	古文書	日高古文書研究会	30
短歌	こくふ短歌会	25	アートフラワー	タジマアートフラワースタジオ	25
短歌	日高短歌会	30			

表133　日高町体育協会加盟協会一覧表（昭和56年現在）

協会名	チーム数	人数	博会名	チーム数	人数
野球協会	22	398	硬式テニス協会	4	83
ソフトボール協会	21	424	バドミントン協会	1	15
スキー協会	3	131	陸上協会	1	33
バレーボール協会	8	70	軟式テニス協会	1	11
剣道協会	1	40	フォークダンス協会	1	18
空手協会	1	113	サッカー協会	1	40
柔道協会	1	50	バスケットボール協会	1	22
卓球協会	5	64	合計	72	1,512

文化祭は、演芸の部と展示の部の二部で構成され、演芸の部では舞踊、箏曲、尺八、民謡、構成吟、合唱が上演された。展示の部では、絵画、写真、生花、つまみ画、アートフラワー、古文書、図書、俳句、短歌の展覧を行った。

社会体育と体育協会

昭和五十六年度の体育行事としては、町民走ろう会、町中央公民館主催による町民陸上競技大会、バレーボール大会、野球大会、ソフトボール大会、卓球大会、スキー大会等を実施している。さらに健康づくりトレーニング教室、体力テストなど実施し、町民の健康と体力づくりに努めている。日高町体育協会は、昭和四十五年に結成されて、その後、各グループ加盟から種目別協会加盟となり、それぞれ種目別協会では、柔道・剣道・卓球（四教室）・空手（三教室）・バドミントン・軟式テニス・バスケットボール・サッカー・フォークダンス・スキー・硬式テニスの各教室開催や野球・バレーボール・ソフトボール等大会を開催実施するとともに、但馬総合体育大会をはじめ国民体育大会冬季大会スキー競技会など各種大会に出場している。昭和五十六年度の体育協会の構

成は、表133のとおりとなっている。

ボーイスカウト

日常生活の中に一二か条の「おきて」を持ち、〝幸福な人生〟と〝よき社会人〟を目ざす社会教育団体、日本ボーイスカウト城崎第一団は、赤松衛、内田伊三雄の二人によって、昭和三十五年四月十七日創立され、今日に至っている。

写真282　ボーイスカウト活動

現在、但馬には一二団が活動し、城崎郡には、第一団（日高町）、第二団（城崎町）、第三団（香住町）の三団が活躍中である。

城崎第一団の運営は、財政面では、育成会（親の会）費、町補助金・寄附金・登録費（団員の登録費）で賄われているが、活動面では、団委員会で運営され、団委員長が統括している。第一団の創立以来今日まで委員長の席にあって、その発展を図ってきた赤松団委員長は、昭和三十八年には、ギリシアで行われた第一一回世界ジャンボリー（四年毎に開催）に出席し、国際交流を行った。

国内ジャンボリーも四年に一回開催され、毎回本団も参加しているが、昭和五十三年は、御殿場のジャンボリーに参加した。

日常活動としては、班活動を中心に

人格づくり（徳性＝宗教性を養う実践）

（日高町実態調査による）

普通乗用車	小型乗用車	自動二輪	軽自動車	原付自転車	作車 特殊用 特業
	155	5	482	1,865	4
2	1,060	15	1,249	2,582	25
11	2,654	29	1,578	2,718	63
37	3,507	77	2,103	3,136	133

健康づくり（野外活動）

知識・技能づくり（他人を助けるための力を高める実践）

等の他、社会奉仕の実践としての交通整理、駅前の清掃、郵便局・警察・病院・駅等の花飾り、歳末募金等の活動を通して、信仰の心と自己犠牲の心の両面の向上を図っているが、昭和四十四年の伊勢湾台風の時には、濁流に孤立した向日置の救援の為、小学校五年生より高校三年生までの団員四一名が、手旗信号による連絡、伊佐橋――赤崎――山越え――向日置のルートによる食糧の輸送等の救援活動を行った。

こうした活動の集積に対し、昭和五十五年には、ボーイスカウト日本連盟より「鷹賞」が団長へ贈られている。

昭和五十六年、CS（カブスカウト）五八名、BS（ボーイスカウト）四五名、指導者二四名の構成となっている。

第六節　高度経済成長と生活文化水準の向上

生活文化水準の飛躍的向上

戦時下から戦後へかけては、諸物資が不足し、特に食糧難のため耐乏生活の連続でまことに苦

表134　自動車保有台数の推移

年　次	総　数	普通貨物自動車	小型四輪貨物車	小型三輪貨物車	乗合バス
昭和41年	2,964	231	135	83	4
45	6,025	158	884	37	13
51	8,405	215	1,097	21	19
56	10,475	276	1,180	2	24

しい生活であったが、幸いにして昭和二十四、五年頃から食糧や諸物資の不足も解消しはじめ、次第に生活水準も回復に向っていった。特に朝鮮戦争による特需ブームによって、その回復を早めたといわれている。

昭和三十年代に入ると、本格的な発展期をむかえ、昭和三十五年には、池田勇人首相による所得倍増論がとなえられ、高度成長時代にはいり、消費は美徳であるなどと言われたりするようになった。

高度成長の結果、国民の文化生活も一段と向上してきた。家庭用電気機具が各家庭に入り、たちまちどの家庭にも行きわたっていった。その家庭用電気機具は、洗濯機、冷蔵庫、ラジオ、テレビなどであった。テレビの普及は白黒テレビは昭和四十六年には日高町で八割の普及率となったが、昭和四十五年二月には道場の山頂にNHK日高テレビ中継放送局が開局し、昭和四十七年一月からは、これを受けて三川山頂に神鍋テレビ中継放送局が開設されたので、日高町内全域の各家庭で鮮明な画像がみられるようになった。白黒テレビはやがてカラーテレビに変り、昭和五十年におけるカラーテレビの普及率は全世帯の約九三%に達している。そのほか、ルームクーラー、電気・ガス・ストーブ、電気掃除器、電気・ガス炊飯器等の電気ガス器具も普及し、各家庭の必需品となっている。

自動車の普及もまためざましく、前頁の表134、自動車保有台数表にみられるごとく、自動車類の総数は、昭和四十一年において二九六四台にも及び、自家用車は推定七戸に一台の保有となったが、その後驚異的な増加を示し、昭和五十六年には、それが各戸毎に一台ずつの保有に達している。乗合バスは昭和四十一年に四台あったが、昭和五十六年には二四台に増加した。

通信機関の発達もめざましく、電話の普及率も高くなったが、昭和四十一年頃からは三方・日高両農協の有線放送の開始による有線電話も各戸に普及し、文化生活に恵まれた時代となった。

町章、町歌、町花・木・鳥

町村合併によって新発足した日高町は、昭和三十一年五月町章を制定した。東京都・折原正典の作品で、日高町の「ひ」の字を図案化し、人の和と躍進

図15　町　章

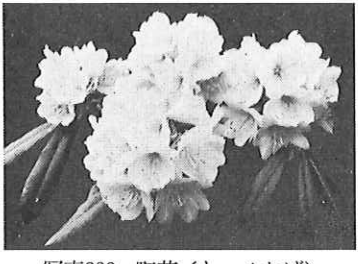


写真283　町花（しゃくなげ）

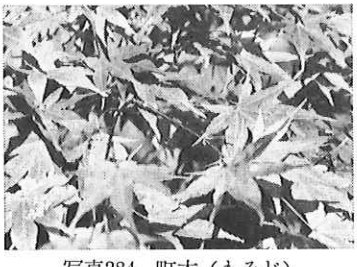


写真284　町木（もみじ）

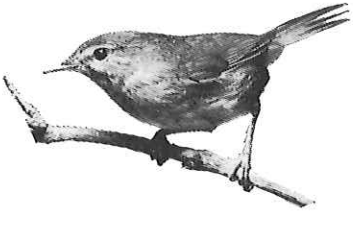


写真285　町鳥（うぐいす）

する日高町を象徴した意味を表現したものである。

町民の歌は昭和四十年十二月に制定された。作詞者は東京都・鹿野里美、作曲は小曾根実。町民の「心のうた」として、機会あるごとに歌われている。

豊かさづくりと自然保護を重要視して、日高町を明るい町、美しい町、潤いのある町にするため、昭和四十七年には、町の特色を生かした町の花・木・鳥が指定された。

町花はシャクナゲが指定された。シャクナゲは三川山から万劫・羽尻に植生している。万劫の栃が谷平はシャクナゲとアスナロの群生地で、県指定天然記念物となっている。

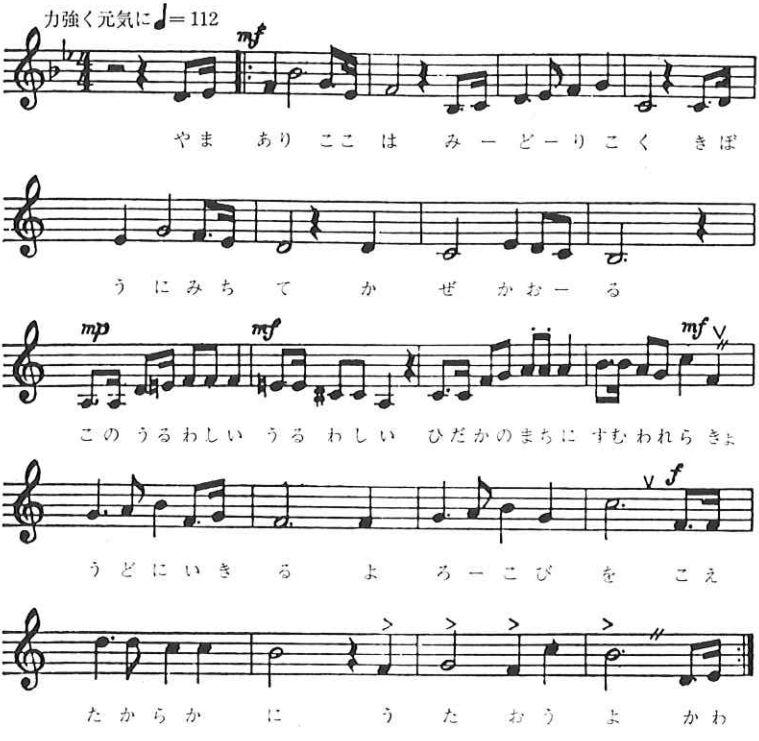
町木にはモミジが指定された。モミジはカエデ類を総称するもので、秋の紅葉の美しさも含められている。

町鳥はウグイスで、その声は私達の心に潤いを与えてくれる。

これらのシンボルにふさわしい理想の町づくりが、わが町の住民に課せられた今後の課題であるといわねばならない。

日高町民のうた

鹿野里美　作詞
小曽根実　作曲



日高町民のうた

一、山ありここは　みどり濃く
　希望にみちて　風かおる
　このうるわしい　うるわしい
　日高の町に　住むわれら
　郷土に生きる　よろこびを
　声たからかに　うたおうよ

二、川ありその名　円山の
　流れは青く　水は澄む
　このゆたかなる　ゆたかなる
　日高の町に　住むわれら
　進取と自主の　意気高く
　産業のあした　ひらこうよ

三、歌ありここは　この町は
　人の和つねに　花とさく
　この誇りある　誇りある
　日高の町に　住むわれら
　未来にかおる　新しい
　文化の庭を　きずこうよ